

- 1 派遣期日 令和元年 11 月 8 日（金）～11 月 9 日（土）
- 2 研修先 会場名 三重県総合文化センター  
所在地 三重県津市一身田上津部田 1 2 3 4
- 3 研修内容  
第 6 9 回 全国英語教育研究団体連合会総会 全国英語教育研究大会

研究主題 校種間の学びの系統性を意識した英語教育

（１）研究への取り組み

地域で輝き、世界で活躍する児童・生徒等を育成するための英語教育の在り方を考えることを目的とする今大会は、第 1 日目には敬愛大学向後英明先生に”The Critical Role of the Teacher in Moving Forward with the New Course of Study”を演題としてご講演いただき、午後の部では小中高 3 本の授業実演を行う。第 2 日目には校種間の学びの系統性に着目した合計 30 の分科会がある。

（２）研究授業（小学校第 6 学年・中学校第 2 学年・高等学校第 3 学年の授業を参観）

三重大学教育学部附属小学校の岡井崇先生と波多野喜美代先生は「主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成～見方・考え方を働かせて～」という研究テーマで、オリンピック・パラリンピックで自分が見たい競技とその理由を述べ、内容や表現などを工夫することで友達により伝わりやすくなることに気づくことをねらいとして、We Can!2 の Unit6 What do you want to watch?—オリンピック・パラリンピック—の授業を行った。本単元の言語材料だけでなく、多くの既習事項を活用してスピーチをする児童の姿から、Small Talk や日々の外国語の授業の中で、意図的に、ふんだんに既習事項に触れさせていることがよく分かった。また、友達とスピーチを発表し合う中での改善点として「友達の表情を見て伝わっていないと感じたからジェスチャーをつけた。」「友達に質問してもらったことをスピーチの原稿に足した。」など「相手を意識した」伝え方についての主体的な姿や「相手を意識する」とはどういうことなのかを共有できていたことも大変重要な点であると感じた。

津市立芸濃中学校の庄山大樹先生は「新学習指導要領を踏まえた言語活動の充実を図る取り組みについて」という研究テーマで、NEW HORIZON English Course2 の Unit7 The Movie Dolphin Tale の授業を行った。教師と生徒の対話を通して既習事項や背景知識を活性化しながら内容を深く理解させた上で、主人公がケガをしたイルカを助けてイルカが幸せになった場面を取り上げ、自分がだれかを笑顔にした経験について伝え合い、最後にはそれを書くという活動が設定されていた。本文の内容や言語材料を理解するだけでなく、内容についての自分の感想や考え、日常生活や経験と関連付けたことを表現したり、相手とやりとりしたりすることも強く求められていた。

三重県立津高等学校の伊藤毅先生は「思考力・表現力の向上につながる知的な授業のあり方」という研究テーマのもと、POLESTAR English CommunicationⅢの Lesson6,9 を踏まえ、「地域の未来」を考えるためのディスカッションの授業を行った。地域活性化や持続可能な発展のために、①人口減少の抑制、②新しい観光産業の創出、③外資系企業の誘致という 3 つが提案され、それぞれのメリットとデメリットについて英語で議論しながら批判的に考察し、グループ内で意見をまとめ、グループ間でのディスカッションへと発展していった。発言は「〇〇さんの意見には賛成だよ。なぜなら～だからね。」「〇〇さんは～と言ったけど、私はそうは思わないよ。だって、その意見には□□というメリットよりも大きい△△というデメリットがあるからね。」等ある程度決まった型にそっており、発言する生徒にとっても聞き取る生徒にとっても大変有効で、ディスカッションの円滑な進行に役立っていた。難しい題材で難しい単語を用いているにも関わらずとても活発に議論を進める生徒達からは、英語でやりとりすることが「知的で楽しい」と感じていることがひしひしと伝わり、自律的な英語学習を今後継続していく姿さえ確信できた。

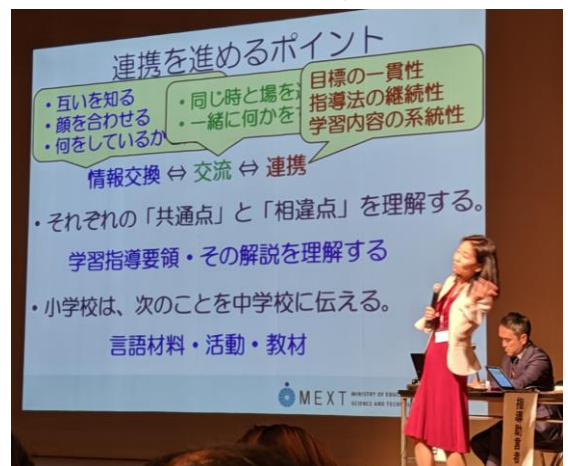
### (3) 分科会

分科会第1部では、小学校授業実演者である岡井崇先生より、英語を使う環境作りや主体的な聞き方・話し方についての話があった。環境づくりについては、居心地のよい学級の中で、他教科等との連携や自分事と思える題材で、英語で聞ける・話せるという英語学習の保証をして初めて英語でコミュニケーションを図りたいと思えるとのことであった。主体的な聞き方については、概要をつかむ「ざっくりリスニング」と、確実に内容を理解する「きっちりリスニング」をバランスよく取り入れた結果、聞き取れた既習の単語から内容を考えようとする児童が増えたという。主体的な話し方を学ぶために行っている Small Talk の手順は、即興的な話題を提示して型を与えずに手持ちの知識を活用して児童同士で伝え合い、中間交流で言いたかったけれど言えなかったことをどう言ったらよいかを既習の語句や表現を使って考え、ペアを変えてもう一度行うというものである。この Small Talk を繰り返すことで、対話を続ける主体的な話し方がかなり身についてきたとのことであった。助言者である文部科学省初等中等教育局の直山木綿子先生からは、突き詰め過ぎると「英語嫌い」を生みかねないが、「単語だけでもよし」とせず、文発話をさせようとするのはとても大切だというお話があった。また、教科書の題材を実生活とどう関連させるかはとても大切で、小学校の担任だからこそ他教科等と結びつけやすいということ、ひいては今後全教科で思考を働かせる必要があり、英語が話せるだけでは対応できない世界になっていくことも付け加えられた。



Small Talk で使っているルーレット

分科会第2部では、名張市教育委員会、名張市立つつじが丘小学校、名張市立蔵持小学校から「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童生徒の育成」というテーマで発表があった。「慣れ親しむ、名張のことを知る、発信する」を通してグローバル人材の育成を図る小中一貫英語教育カリキュラムが整えられている名張市では、小学校の低・中・高学年、そして中学校それぞれの段階での目指す子どもの姿が具体的に示されており、「なばり学」をもとにした「なばり英語カード」が各校に配られていた。つつじが丘小学校では、各委員会と連携したり各国の情報を載せたりした掲示物が充実し、多くの英単語や英文、異文化に気軽に触れられる環境が整っていた。また、小中のALTと地元大学の留学生を招いた国際交流イベントも紹介され、主体的に外国の文化について学んだり、日本の文化について伝えたりする場になっていた。蔵持小学校では、オーストラリアの小学校との交流として日本への修学旅行を実施していた。学校で一緒に生活したり、児童宅でのホームステイをしたり、事前・事後にも手紙やビデオレター、テレビ会議システムでの交流が行われていた。直山先生からは、小中高の連携を深めるためには、行政がハード面を整える必要があるという話があった。また、子どものつたない英語でもほめてくれるALTとの交流ももちろん大切だが、いい意味でそのようなサービスをしない外国の同年代の子どもたちと交流できることは本物のコミュニケーションを学ぶ上で大変素晴らしいとのことであった。文字の有用性についても話があり、文字の利便性を伝えるとともに、書き写させるものだけでなく掲示物等についてもフォントを教科書と揃えるなど子どもたちが混乱しないように気を遣ってほしいとのことであった。



小中高連携についての直山先生の話

### 4 感想

令和2年度に小学校より順次全面実施されていく新しい学習指導要領に向けて準備を進めている今、小中高の授業を一度に参観し、日々英語教育にご尽力されている方々の講話や助言を聞いたことで、その系統性やそれぞれの段階における目指すべき児童・生徒の姿がより具体的にイメージできた。今回の研修の機会を頂いたことに感謝し、今後の教育活動に生かしていきたい。